

12月に世界で初めて、ナチュラが東京大学をはじめ、外大と提携でミドリミドリミシの商業大実施している。

行)に就職した。それでも週末にはミドリミシの研究を続け、二足のわらじははけない、と大量培養のめどもないままに思いきって1年で退職。2005年、ユーグレナ社を起業し現在に至る。

斬る

紅葉シーズン

▼キャンパスが山の中なので、通学中に紅葉狩りを楽しみます。(法政③女)
▼近所の幼稚園で「落ち葉のプール」で遊ぶ子供たちを見て、和んでいます。(城西③女)
▼毎年、京都の紅葉に焦がれつつ見に行けなくて残念です。(聖心女子②女)
▼ドラマによく登場する大学の大学。学内を歩くと落ち葉が舞いヒロインの気分。(成蹊②女)
▼紅葉をしみじみきれいなと思える風流な人間になるためには、あと20年必要か。(上智④男)
▼一眼レフを手に入れたので、横浜の日本大通りにイチョウを撮りに行きました。(神奈川④女)
▼富士急のジェットコースターの後の紅葉がとても鮮やかでした。(立教③女)
▼紅葉狩りに彼氏と行ってみたいです。高尾山とかいいですかね。(明治④女)

編集部から

3連休の日曜日、6回目のつくばマラソンのフルに出場。今年は筑波大学の協力で「マラソンを科学する」をテーマに、時間差のウェーブスタートやランナー心理を考慮した給水所の色彩の変化などを試みたそうです。でも、そんなのを余り余りなく、記録更新どころか歴代ワースト記録。ランナー仲間との打ち上げで、来年2月の初東京マラソンに向けて精進を誓いました。【編集長・内山勢】

愛媛スイーツ 味わって

都内20店 県がフルーツ提供

愛媛県は、スイーツを通じて首都圏の女性や若者に地元農産物をPRしようと、東京都内の提携カフェなど約20店舗で旬の地場産フルーツを使ったスイーツを提供する取り組み「えひめスイーツコレクション」を始めた。

愛媛産果物を使ったオリジナルスイーツメニューを各提携店が開発し、店内で提供する。

キックオフイベントがこのほど、東京・銀座のカフェであり、中村時広・同県知事＝写真右端＝



のほか、県産イチゴ「紅い雫」のイメージキャラクターを務めるタレントの壇蜜さん(同右から2人目)、同県出身の俳優の石丸幹二さん(同3人目)、同県イメージキャラクター「みきゃん」(同4人目)が登場した。中村知事は「愛媛は柑橘王国と呼ばれていますが、キウイの生産量は日本で1位、クリが3位。ほかにイチゴ、柿などスイーツに使えるようなフルーツを多数生産しています」とアピールした。【小倉英里】

ビジネスパーソンの情報源

BizBuz

毎日新聞
デジタル

<http://bizbuz.jp/>

ビジネスマンにとって、ニュースは必要不可欠。「BizBuz(ビズバズ)」では、新たな商品やサービス、話題のスポットなど、ビジネスシーンで「会話のネタ」に使える最新情報をお届けします。

高齢者に選手用リハビリ

大阪の施設 生活の質向上に貢献

厚生労働省によると、日常生活に制限のない期間(健康寿命)が2013年時点で男性が71.9歳、女性が74.2歳と伸び続けているが、01年から13年までの健康寿命の伸び(男性1.79年、女性1.56年)は、同期間の平均寿命の伸び(男性2.14年、女性1.68年)と比べて小さいことが分かった。政府は、高齢者の生活の向上や医療費や介護費の削減を目指し、20年までに健康寿命を1歳延ばすことを目標に掲げている。そんな中、一流アスリート向けにリハビリ施設が、高齢者向けにサービスを提供し、成果を上げている。その現場を訪ねた。【猪狩淳一】

のが、1日30分歩くようになった。テニスをやる夢を見るほどだったので、実際にプレーするのが本当に楽しみ」と笑顔を見せた。アスレチックトレーナーの上原和浩さんは「最初は暗い表情をしていた利用者もトレーニングで達成感を得て明るい表情になります」と話した。

大阪府茨木市の「ジューハイ・フィールド ハビリス」は、5月、整形外科医でサッカーJリーグ・ガンバ大阪のチームドクターを務める高島孝之院長が、アスリート向けリハビリ施設として開設した。約10人のスタッフは、身体機能回復のリハビリテーションを行う理学療法士と、スポーツ選手のけがの応急処置やリハビリ、コンディショニングなどを支援する日本体育協会公認のアスレチックトレーナー、鍼灸師といったリハビリの専門資格を持っている。

200年続いた酒蔵の一部を利用した施設には、元サッカー・イングランド代表のデ

経済産業省の産業活動分析によると、大手フィットネスクラブの会員のうち60歳以上の割合が年々増加しており、利用者の年齢構成比では05年から5年間で、30歳代が24.1%から20.7%と5.4%下がったのに対し、60歳以上が19.1%から24.9%と5.8%上がっている。また、14年の「スポーツクラブ使用料」の1世帯当たりの年間支出金額をみると、世帯主が60歳の世帯の支出金額が7194円と最多で、1世帯1人当たりの年間支出金額も2655円と最も多くなっている。



高島院長は「アスリートがけがをした部位に負担をかけずに体の動かす方法と、病気などで機能が低下した高齢者がうまく動くためのコツは同じなんです」という。さらに「高齢者の方が可動域が狭く、無理をするとかえって体を壊してしまう恐れがあり、アスリートよりも指導は難しい」と専門家のサポートの重要性を指摘する。

同施設を利用する65歳の女性、約8年前に脚を悪くして好きなテニスができなくなっていたが、トレーニングして数カ月でボールを打ち返せるまでに回復した。「トレーニングで日常生活でも力が出たように、歩けなかったのが注目されるだろう」。

高島院長は「ハビリス」という施設名を、「リハビリ」の語源ともなったラテン語の「Habere」から生まれた「発達」や「機能の獲得」など意味する「ハビテーション」から付けたい、「施設にきたときよりさらによくなるように」と名付けました」と語る。さらに「高齢者のリハビリ」というと寝起きや食事など最低限の生活ができるまでを目的とするが、社会のために役に立って、自分の趣味ができるようになるのが、これからの高齢化社会に必要なのではないかと話す。

2020年代初頭には団塊世代が一斉に後期高齢者に入し、高齢者の健康は社会の大きな課題となる中、こうした積極的な健康への取り組みが注目されるだろう。